様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　５ 年　７ 月　４ 日現在

機関番号：１４５０３
研究種目：若手研究
研究期間：2019～2022
課題番号：１９Ｋ１４０６３

研究課題名（和文）近代日本における〈骨相学〉の受容と展開に関する教育史的研究

研究課題名（英文）History of Phrenology in Modern Japanese Education

研究代表者
平野　亮（HIRANO, Ryo）

兵庫教育大学・学校教育研究科・准教授

研究者番号：４０６３６４２９

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　800,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は，近代日本における骨相学（phrenology）の受容と展開について，教育史学の立場から調査・検討したものである。第一に，マクロな視点から，phrenologyの数多の訳語を整理し，幕末以降の原書の流入を幕府旧蔵資料及び帝国図書館の目録から跡づけ，明治大正期の医・心理・美術・犯罪・文学，そして教育を含む広範な領域の文献や講義に骨相学が取り上げられていたことを明らかにした。第二に，ミクロな視点から，長岡士族の骨相学者高橋邦三（1861-1913）の生涯とその思想形成について検討し，彼が特に教育分野への応用を推進した骨相学は，養生／衛生と自分探しのための科学的術知としてであったと考察した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究は，近代日本における骨相学について教育史の立場から検討した，日本で初めての本格的試みである。報告者は以前に，教育に関わる人間観について西洋における骨相学を素材に歴史的に分析し，「能力人間学」という語を導入してその教育史的意義を考察したが，本研究はその近代日本における検討の端緒ともなる。近年も進展している骨相学の各国・各地域史研究の，「日本」という空白を埋める成果であるとともに，「能力」概念や「測定」行為にますます依存を強めているように思われる現代の教育を省察していく契機となる，好個の歴史的素材を提供する成果になっていると考える。

研究成果の概要（英文）：This study discusses the reception and development of phrenology in modern Japan from the viewpoint of the history of education. First, from a macro perspective, I organized a number of translations of the word “phrenology.” I found that there were original texts of phrenology from the end of the Edo through the middle of the Meiji periods by checking the catalogues of books formerly owned by the Bakufu and in the Imperial Library. Phrenology was covered in a wide range of scientific and cultural areas, including medicine, psychology, literature, art, criminology, and education in the Meiji and Taisho periods. Second, from a micro perspective, I take as a case study the Japanese phreonologist Kunizo Takahashi, who was the son of a samurai in Nagaoka Domain, including his life and development of his thought. In particular, I examine how he attempted to apply phrenology to the field of education as a scientific tool for physical and mental health care/hygiene and self-discovery.

研究分野：教育史学

キーワード：Phrenology　近代化　個人主義　骨相学　高橋邦三　長岡　養生／衛生　自分探し

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

19 世紀の前半を中心に欧米世界で一大ブームを巻き起こした骨相学（phrenology）は，科学史上の代表的な「擬似科学」の例に数えられてきた一方で，西洋社会におけるその歴史的・文化的影響の大きさが先行研究によって漸次明らかにされてきた（de Giustino，1976; Cooter，1982; van Wyhe，2004，etc.）。そのような骨相学が，急激な西洋化を突き進んだ幕末開化期の日本へも流入していたことは，種々の論考においてこれまでも指摘されてきたが，残念ながらそれらは断片的言及にとどまり，まとまった検討はなされてこなかった（坪井，2001; 長沼，2017，etc.）。さらに，欧米を舞台とした骨相学の教育史的意義についての優れた論考にはいくらかの蓄積があったものの（Bakan，1965; 小松，1998; 大田，2005; Tomlison，2005; Hershenson，2008），日本におけるものはなく，一方で明治大正期の教育言説に骨相学の痕跡がみとめられることから，教育史学の立場からの考察が待たれる状況であった。

２．研究の目的

申請当初の研究目的は，近代日本，とくに明治大正期の日本における骨相学の受容の実態と思想的影響の一端を，教育史学の立場から実証的に明らかにすることであった。この際の「教育」とは，近代学校制度ではなくより広汎に，「人間」を扱う視点を意図した。西洋化の影響を受けた人間観の新たな諸相と，それに基づく人間関係（コミュニケーション）の表象と条件，文化的営為を対象とする検討である。

「近代」の柱の一つは「啓蒙」である。本研究は，これまで等閑に付されてきたと言うべき近代日本における骨相学の受容と展開を探査し，「教育」の時代の新たな一側面を浮き彫りにすることで，近代教育史研究の厚い歩みを進めることを目的とした。

３．研究の方法

研究に着手するにあたって，最初に，近代日本が西洋から骨相学を受容した仕方には次の 2 通りがあったことを推測し，取り組むべき課題の歴史的類型を方法的に大きく二つに整理した。一つは，“それを西洋の骨相学と知ったうえで受容し展開した”場合，もう一つは，“それらの知識や思想や技術を西洋の骨相学とは知らずに受容し展開した”場合である。これら 2 通りの受容史を検討するために，申請時点では，以下の 3 つの作業・考察を計画した。

① 開国前後から大正期頃までの時期の日本の各種史料に現れる骨相学について調査し，その流入と展開の状況を概説的に整理・分析する。

② 骨相学者で教育者（商業学校教員，京都商業学校校長，私立哲学館・早稲田大学講師）だった高橋邦三（1861-1913）の言説を検討・考察する。

③ 文部省百科全書の首巻『教導説』（1876）の来歴や内容，影響等について検討・考察する。

このうち①②が 2 通りの受容史のうちの前者，③が後者の検証となるはずであったが，実際には，今回の研究期間では①②の研究にのみ取り組むことができた。そこで，本報告書ではそれら①②の研究成果について報告し，最後に③の研究の途中経過も付記して，今後の課題とする。

具体的な手法については，いずれも史料の調査・探索・入手・読解，またいくらかのフィールドワークで構成された。①は，本研究の議論の土台ともなる一般的な骨相学受容の概説史の描出を目指して，でき得る限り多種多様の史料を博捜することを心懸けた。他方の②は，ミクロなアプローチのために，一層内外の機関・組織や専門家らの調査協力を仰いだ。そしていずれにおいても，昨今の電子テキストサービスの整備拡充には多大な恩恵をこうむった。デジタル・ヒューマニティーズのような分野の進展にも刺戟されつつ，各種データベースを積極的に活用することができたおかげで，新型コロナ感染症のパンデミックによる“制約”を種々受けざるを得なかった本助成期間にあっても，着実に研究を進めてゆくことができた。

４．研究成果

（1）Phrenology の翻訳語

Phrenology の翻訳語は「骨相学」だけではなかった。そこで最初に，幕末～大正期に著わされた史料で用いられていた phrenology の翻訳語を調査し，整理した。文献読解のためにも，データベースでの効果的な検索のためにも，有用な成果であると言える。一用例しか見つからなかったものも多いが，拾うことのできた全てを列挙しておく。

骨相学	骨相論	骨相術	骨相説	相骨論	西洋骨相学	脳蓋学	脳学	相脳学
脳相学	察脳学	脳髄機能論	横隔膜学	心学	生理心学	生理心理学	生理的心性学	性相学
西洋人相学	欧米観相術	観相奇術	フレノロジー	フリノロジー	フレノロギー	フレノロジー術	フレノロジー学	

（2）原書の流入と翻訳・訳述書（私家版・公刊）
19 世紀の欧米では骨相学の専門書が膨大に発行された（cf. Cooter, 1989）。そうした原書が近代初期の日本にも流入していたのかどうかを確かめるべく，今回は下記 a）～c）の 3 つの文献目録及びデジタルアーカイブを用いて調査した。もとより網羅的調査には到底至らないが，“phrenology”に加えて“Gall”“Spurzheim”“Combe”といった骨相学の代表的論者をいくらか選定し，それらに特に注目しながら検索を行った。その結果，20 種近くの原書の存在が明らかになった。（文献名は拙稿（2020a）を参照）

a）葵文庫目録（静岡県立図書館編『江戸幕府旧蔵図書目録』1970 年）
b）内閣文庫（国立公文書館デジタルアーカイブ）
c）帝国図書館洋書目録（帝国図書館編『政治・法律・経済・社会・統計』1898 年；『歴史・伝記・地理・紀行』1898 年；『哲学・心理・倫理・論理・教育』1899 年；『文学及語学』1900 年；『農業・商業・工業・美術・工芸・陸軍・海軍』1901 年；『理学・数学及医学』1903 年）

一方，翻訳・訳述書であることが明記された，ある程度まとまった専門書としては，以下の 5 点の存在が確認された。

・ チャンバー『骨相学』（長谷川泰訳）文部省（百科全書）
・ 寶列爾（ファウラー）『図解欧米人相学』（三橋村雄・江口武壽訳）東生鉄五郎，1885 年
・ ジュウゼツプゴール氏『フレノロジー術』（松田松樹訳）松田丈吉，1895 年
・ コーム氏『性相学原論』（松軒翁訳）三星社，1917 年
・ セヴァーン『セヴァーン氏骨相学』（二村芳泉訳）漱文堂書店，1921 年

この他に，先行研究によって西村茂樹（1828-1902）がまとまった量の骨相学書を私的に翻訳していたことも明らかになっている（高橋，2018）。加えて，日本人が執筆した専門書も，1890 年頃を境に増加していた（佐藤，1890；市川，1900，etc.）。

（3）歴史上の著名人による骨相学への言及
骨相学との多少の接点を持った歴史上の著名人は，明治大正期の日本にも少なからずいた。その態度は様々だったが，数例を挙げると，大隈重信や尾崎行雄，犬養毅，園田孝吉，矢野恒太や大倉喜八郎，増田義一，成瀬無極や石川倉次，井上通泰らは骨相診断を受けたし，坪井小五郎や福来友吉，小林一三らは講演を聴講した。坪内逍遙は彼自身が講演を行った。南方熊楠や芥川龍之介は日常生活のなかで骨相学に言及していたし，井上円了，森鴎外，福地復一，永峰秀樹，新渡戸稲造，森田正馬らは個人的に興味を持って研究し，剰え真剣に活用を企図する者もあった（骨相学に否定的態度をとった福澤諭吉でさえ，その可能性には留保を示した）。
明治大正期に観相見の露店が流行していたことが当時の東京朝日新聞（1912）に報じられているが，その時分の「西洋ばやり」のために，実際の如何にかかわらず“骨相学”を謳った店も見られたという（玄竜子，1917；齋藤，1918）。そのような風潮を原因ともし・結果ともするような，骨相学の展開の一面を裏付けることができた（拙稿，2020a）。

（4）近代日本文化の各種領域に観察される骨相学の分布
骨相学は，その理論の提唱者であるＦ・Ｊ・ガル（1758-1828）の助手を務めたＪ・Ｇ・シュプルツハイム（1776-1832）によって「人間学（Anthropology）」であると標榜され，学際的体系であることが自任されていた（Spurzheim，1815）。そのような骨相学の広がりを近代日本文化においても跡付けるべく，多様な各種領域の文献に登場する骨相学の語及び言説を探査し，記述的にマッピングした（cartography）。すると，賛否や肯定否定，態度の積極消極等の別はあるものの，広範囲に骨相学が分布し，議論の俎上に上がっていたことが明らかになった。拙稿（2020b）では，【医学】（解剖学・生理学）【心理学】（道徳科学）【文学】【美術】【犯罪学】【教育学】の各種学術書における出現や，より通俗的な【迷信】【人種主義】【結婚】【占い】【衛生・養生】【職業指導】における言説のなかに，骨相学を発見・観察することができた。
本調査結果で興味を引かれたのは，各フィールドに共通しそうな特徴の一点として浮かびあがった，「個性」への焦点化である（または，それに付随もする「類型」への関心）。なかでも「個性」の科学的鑑別を希求した教育界と法学界が，他方で「能力」という語が多用された明治初期のフィールドでもあったらしきことが（平野，2018），近代の教育志向と現代の教育的思惟を省察していくうえで，示唆に富んでいるように思われる（拙稿，2020b）。

（5）日本の骨相学者高橋邦三の骨相学的教育論
近代日本における骨相学の受容と展開について，俯瞰的に全体像を捉えようとした研究①（上記成果（1）～（4））に対して，個別具体的な相から迫ろうとしたのが研究②である。分析対象

としたのは，中等・高等教育の現場で教鞭を執り，京都商業学校では校長にも任じられ，帝国教育会の会員でもあった「教育家」の一面を持つ一方で，プロの「骨相学者」としてその生涯を終えた経歴の持ち主，高橋邦三である。

ａ）略歴，原書コレクション

数えで 8 歳の頃に明治維新を体験した高橋は，敗戦の地であった郷里の長岡の学校で 18 歳まで学んだ後，上京して工部大学校や商法講習所に通った。いずれも卒業することなく大倉組商会に入り，本邦初の海外支店だったロンドン支店に 8 年間勤務して，支店長も務めた。英国で骨相学に出会った高橋は，帰国後会社を退職し，教職に奉職する傍らその実践・普及に励んだ。骨相学への没頭が原因となって校長職を追われたあと，阪神地域から東京へ移住し，1903 年に赤坂に「東京心性学館」を開設して骨相学の診察や講義に従事した。

高橋の死後，彼の蒐集した膨大な原書コレクションは，紆余曲折を経て，東京帝国大学に寄贈された。この「フレノロジー関係書籍 300 冊」（永峰，1928）について，現・東京大学総合図書館の協力を得て，図書原簿を参照しながら可能な限り書籍の特定作業を行い，図書館による「寄贈印」がない図書にも寄贈本であることが推測されるものがあることを確認できた。現物確認できた点数（雑誌の切り抜きのようなものも含まれるため「冊」と言うべきか難しい）が 308 前後であったため，先ずは証言の残る寄贈数との近似を示すことができた。

詳細については拙稿（2022a，2022b）に譲るが，ここでは，その発表後から本報告までに明らかになった諸点について述べておく。なお，それらの進展については，2022 年 12 月にリニューアルされた国立国会図書館デジタルコレクションに多くを負っている。

第一に，高橋が在英中に骨相学に出会った経緯が不明であったが，内外用達会社（大倉組商会）の赤星弥之助（1853-1904）がきっかけであったらしき記述が見つかった（『実業の日本』1903 年 10 月）。連れ立って現地の骨相学者の診断を受けて，その適中度の高さに驚嘆したことが傾倒の始まりだったという。

第二に，高橋の旧蔵書の一部が帝国図書館（現・国会図書館）に寄贈された可能性のあることである。「高橋の読んだ本の一部は上野図書館に所蔵されている」（天眼道人，1926）とは，寄贈を言うのか単に同様の書の所蔵を言うのか判然としないが，残念ながら調査依頼も個人による調査も不可であるとの国会図書館の回答を受け，今の所は確認の手立てがない。

第三に，高橋の没年月日が「1913 年 2 月 27 日」辺であろうことが判明した。1937 年版の『如水会会員名簿』には「1 月 27 日」とあったため拙稿（2022a）執筆の際に拠ったが，『東京高等商業学校同窓会名簿』（1913）には「2 月 27 日」とあり，『帝国鉄道協会会報』（1913）には「28 日」に訃報記事が掲載されているため，市島謙吉が「3 月 1 日」に訃に接したことを考え合わせれば，いずれこの辺りであると考えられる。入沢達吉は，ニューヨーク滞在中に日本の新聞の訃報記事で高橋の死を知ったことを記しているため（入沢，1932），新聞の特定により没年月日の確定ができるかも知れない。

ｂ）教育論

高橋は，彼のいう「生理心学」の知見を特に「教育上に応用したい」と考えており，実際に様々な学校や教育家の集会で精力的に講演を行った。本研究では，私立兵庫県教育会での講演記事 5 本と，帝国教育会の機関誌『教育公報』に掲載された記事 3 本を検討した。先ず興味深かったのは，所謂教育の方法に関する具体的な提案や議論が一切語れていなかった点である。そこで，脳神経科学の難解な用語も飛び交う高橋の「教育」言説が，当時の教育家に如何にして受容され得るものであったかという視点から分析・考察を加え，その結果，それが同時代に「養生／衛生」論と「自己発見」論としての教育論として受容される可能性があった，との仮説を導き出すに至った。

槇山栄次（1908）によると，当時希求されていた「新しい教育学」は，生理学的な心理学に依拠することで成立すると見られていた。槇山が，高橋の学説にもその可能性の一片を認めていたことは，同時代の教育家たちが彼の論考や講演に対してとっていただろう態度や抱いた心性に通じているかも知れない。他方，社会的背景としては，激動の明治時代による「神経衰弱」の大量発生があった。「明治人の感じていた主観的な疲労感」の表象（度会，2003）としての神経衰弱が，殆ど流行現象の様相を呈するまでに蔓延したことは，脳科学をベースとすることを主張した骨相学受容の素地を醸成したのではないだろうか。そして，「脳の衛生」に基づく生活上の心構えや注意点を提示する高橋の養生論が，「教育」論として講じられたのである。

自己発見の文脈は，進路指導論の形もとる。骨相学の診断が示すのは，個人の能力特性であった。近代における身分制の解体や「セルフ・ヘルプ」の哲学は，科学的適職を提示しようとする骨相学的な術知を必要としただろう。様々な著名人の骨相学的特性を列挙した『教育公報』の記事は，それぞれの類似した精神的特性を有する人たちにロールモデルを示す，“ 人生カタログ ” の役割も果たし得たのかも知れない。

高橋がそのような教育論を展開したのには，彼の生い立ちと思想形成が少なからず関係していたはずである。武士の家に生まれ士族として生きたこと，生まれ育った長岡が「賊藩」であったこととそれゆえに「教育」に非常に注力した土地柄であったこと，長く異国に暮らして「最先端」の文物に触れるとともに世界一周をさえ果たしたことなどは，まさに高橋こそが，自己発見と養生／衛生の科学的術知を最も必要とした「近代」人の一人であったことを示唆している。そして，彼は幼少期には医師を志していたとも言われる。高橋は，英国で身に付けた「生理心学」を駆使することで，明治大正期の日本における個人と社会の双方の養生／衛生を支え・促進する，「医師」たらんとしたのかも知れない。この「医師」が即ち「教育家」の姿と活動をとったのが高橋邦三であり，これが，近代日本における骨相学の受容と展開に関する，教育史学の立場から検討した，一つのケース・スタディである（拙稿，2022c）。

なお，高橋に関する以上の調査の過程では，次の各組織（個人名は略）に研究協力を仰ぎ，各処でフィールドワーク・史料調査を実施した。新潟県立長岡高等学校，長岡市立図書館，新潟県立図書館，東洋大学井上円了哲学センター，大成建設株式会社，ロンドン日本協会（Japan Society），日本クラブ（Nippon Club），東京経済大学，筑波大学附属視覚特別支援学校，帝国ホテル，神戸市立図書館，神戸地方法務局（本局），大阪府立図書館，兵庫県公館県政資料館，神戸市文書館，兵庫県立神戸商業高等学校，京都市立西京高等学校，京都歴彩館（旧京都府総合資料館），東京都立図書館，国立国会図書館，東京大学附属図書館。

（6）今後の展望

上記③の研究を継続中である。文部省百科全書の一冊である『教導説』（1876）は，スコットランドのチェンバーズ社が出版した *Chambers's Information for the People* というシリーズの一冊 *Education* の翻訳である。この翻訳版の本文中には骨相学的知識が散見され，ガル（「ゴール」と表記）の名前さえ登場するのだが，これまでの教育史研究において指摘されたことはなかった（平野，2016）。さらに，翻訳の底本とされる 1867 年 Philadelphia 版では，それ以前に刊行された諸版の記述と比較したときに，骨相学の影響を受けていることの判断材料にもなる文章が一段削除されていたことも相俟って，翻訳者の箕作麟祥も当時の読者も，その教育論の理論的背景の一つに西洋の骨相学があったとは知る由もなかったことだろう。一方で，『教導説』は明治初期の師範学校で最も利用された教育学教科書の一つであり（橋本，1998），それゆえに，近代日本の最初の学校教師たちに，骨相学の理論や思想や用語がそれと知られることなく，何らかの影響を与えている可能性も否定できない。

本助成期間満了の時点では，『文部省雑誌』『文部省年報』『教育雑誌』，各師範学校規則のほか，各大学史，都道府県史，特に逐語検索機能が向上した国会図書館デジタルコレクションを活用しながら各種の史料を蒐集・閲覧して，「教導説」の出現やその文脈を調査中である。併行して，『教導説』本文の私訳も進めている。興味深い事例としては，本書が少年囚の教科書に指定されていた例も見つかったため（『教育文化史大系』12 巻，1956），特に関心を払いつつ研究を継続する予定である。

以上は，近代日本における骨相学を対象とした教育史研究の最初の成果となる。海外では，近年も骨相学史関連の大部の研究が発表されているが（Finger & Eling，2019），特に進展著しい骨相学の各国・各地域史（Finger & Eling ed.，2021，etc.）に対しては，本研究がその「日本」という空白を埋める成果となるはずである。近代日本の文化史あるいは教育史の新しい 1 ページの解読にささやかながら寄与するとともに，現代の教育を省察するための好個の歴史的素材を提供する成果になっていると考える。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計5件（うち査読付論文　1件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　5件）

１．著者名 平野亮	４．巻 56
２．論文標題 近代日本における骨相学のカルトグラフィー（１）	５．発行年 2020年
３．雑誌名 兵庫教育大学研究紀要	６．最初と最後の頁 1-11
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 平野亮	４．巻 57
２．論文標題 フレノロジー・レセプション（明治大正篇）：近代日本における骨相学のカルトグラフィー（2）	５．発行年 2020年
３．雑誌名 兵庫教育大学研究紀要	６．最初と最後の頁 15-26
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 平野亮	４．巻 10
２．論文標題 日本の骨相学者高橋邦三の伝	５．発行年 2022年
３．雑誌名 国際井上円了研究	６．最初と最後の頁 259-299
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 平野亮	４．巻 28
２．論文標題 東京大学総合図書館所蔵の骨相学関連文献 ： リストと小解説	５．発行年 2022年
３．雑誌名 研究論叢	６．最初と最後の頁 53-69
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.24546/81013449	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 平野亮	４．巻 61
２．論文標題 高橋邦三の「生理心学」：或いは近代日本における骨相学の歴史的意義に関する一考察	５．発行年 2022年
３．雑誌名 兵庫教育大学研究紀要	６．最初と最後の頁 1-17
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.15117/00020148	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計0件

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関